



Subaru

# 昴 男声合唱団 ニュース №302 '11. 05. 07

…5月6日（金）…

## 「Amazing Grace」他をレッスン

□定例レッスン日の5月6日（金）は、奥村さんの体操、千秋先生のヴォイストレーニングに始まり、檀先生の指揮、静さんのピアノで、「Amazing Grace」、「フィンランディア」、「海に生きたあなたよ」、「鶴」、「道」、「聞け」、「アムール河の波」と「落葉松」をレッスンしました。出席は、35名でした。

□団員の要望により、檀先生に「落葉松」をソロで歌っていただきました。みな『さすが！』と感嘆、合唱の良いお手本になりました。

□本並先生は風邪がまだ治りきらず、体調不良でお休みでした。他にも風邪でお休みが何人かいます。おだいじに。団員の皆さん、コンサートへ向けて体調管理にいっそう気をつけましょう。



□「5月の風コンサート」までレッスンはあと、5／10（火）、15（日）、20（金）の3回しかありません。まだ、楽譜や歌詞カードから目が離せない人もいます。自分で自信をもって歌えるよう、一人ひとりの責任で、CDやICレコーダーを活用して**自習**して望みましょう。

□参加協力券（チケット）は、当日入金予定も含めて590枚ほどで、目標700枚にとどいていません。各団員もうひと踏ん張り拡大して東日本大震災の義援金をひねり出すよう努力しましょう。

□樋渡さんの御見舞いに吉田さんと岡邑さんが相次いで行きました。だいぶ予断をゆるさない状況のようで悲しいことです。目をつぶったまま、枕元で昴のCDを流してずっと聞いておられるということです。

## 十六歳で捕虜に

藤後 博巳

毎年八月になると、日本の敗戦直後の、悪夢のような消し去ることのできない記憶が蘇ってきます。それは、戦時中は本土のようなひどい戦禍を受けることなく、平穀無事だったかつての満州—現在の中国東北部で敗戦を迎え、この日から、身近に「死」という問題に直面することになったからです。

敗戦当時、私はハルピン市郊外の日本人移民による満州開拓団の指導員を養成する満州開拓青年義勇隊訓練所にいました。

あどけない十六歳の軍国少年でした。

敗戦間もなくして当時のソ連軍の進駐と同時に、この訓練所が奥地から引き揚げてきた日本人開拓団の人たちの難民収容所として供されることになりました。私はこのとき初めて、この人たちから、開拓団を守ってくれると信じて疑わなかった満州国駐屯の関東軍に見捨てられた開拓団の悲惨な末路と、日本人に農地を奪い取られた中国農民の報復的な略奪、ソ連軍の暴虐無尽な振る舞いを知り、敗戦という冷厳な現実を悟らされました。

敗戦一ヶ月後に満州全体にわたって、日本人成人男性が訳の分らぬまま、ソ連軍に身柄を拘留されるという事件が起きました。当時、これは「日本人狩り」といわれて大変恐れられ、今流で言うならば「拉致」です。当初、その対象者が成人と聞いていましたが、未成年の私たちにも、その災難が降りかかってきました。

身柄を強制的に拘留された私たちは、ある日、最寄りの駅からどこへ行くとも告げられず無蓋車に乗せられました。そして、それまで自由の身だった私たちは厳重なソ連軍の監視下に晒されます。わずか十六歳でソ連軍の捕虜となつたのです。私たちは民間人の大人たちとソ満（今のロシア・中国）国境近くの牡丹江という所に連行されて行くことになります。

列車が丸一日を費やして着いたところが、ハルピンから東におよそ二百キロ離れた山深い横道河子という小さな駅でした。この先から鉄道が、日本軍によって破壊されていたためでした。私たちは駅構内を出た途端に凄まじい光景を目にします。それは自動小銃を突きつけて目が血走ったソ連兵の略奪でした。このときに貴重な衣服、携帯食料が入ったリュックサックを多く失います。この暴虐無尽なソ連兵の蛮行に抵抗することもできず、私たちはその無念と恐怖に慄き、勝利者の驕りを垣間見る思いでした。このときほど敗戦の慘めさ、悔しさを実感させられたことはありませんでした。それまで日本の必勝を信じて疑わなかった軍国少年の私にしてみれば、無理からぬことだったかも知れません。

ここから捕虜収容所に連行されることになって過酷な行軍を余儀なくされます。連日に亘るどしゃ降りの中で、テントも合羽もなく、みんなで寄り添って寒さに震えながらの野宿、食べ物はソ連軍から与えられず、あるのはわずかの携帯食料のみで食べ尽くしたあとは、悪いと知りながらも中国人農地から玉蜀黍や馬鈴薯を盗んで飢えを凌ぐという、かつて体験したことのない、飢餓の試練を受けることになります。

連行途上で私はあまりにも衝撃的で悲惨な同胞の「死」を初めて目にします。それは、道ぎわに奥地の日本人開拓団が逃避行の途中で餓死したのか、はたまた大人たちの足手まといとなって殺されたのか、幼い三人の子どもが行儀よく並べられた上に蓮が被された哀れな姿でした。

一方道から少しはなれた小川の辺りに目をやると、そこには戦闘で傷つき、恐らく最後の水を求めて川にたどり着いたときに息絶えたのであろう、すでに腐乱し半ば白骨化した目を背けたくなるような無残な兵士たちの姿がそこにありました。

この衝撃的な二つの惨事は、私にとって生涯忘れることのできない戦争の生々しい傷痕であり、戦争の虚しさ、平和の尊さを少年ながらこのときほど思ったことはありませんでした。

(次号につづく)